たし）

・仁寿殿の西側に植えてあった紅海を賞翫する内宴に参列した（のもこの今の時期であった）

・その梅の花を見る者は同じなのに、この太宰府で見る梅の花と以前見てきた梅の花とは同一ではない。

・梅の花だけは昔と変わらずひとり咲き新春を満喫しているが、私にとってはこの期を迎えるのは一層、悲しみを増長させるだけの事である。

考察

［一句目「宣風坊北新栽處」について］

道真の『書斎記』の中に次のような一文がある。

東京宣風坊有一家。《中略》戸前近側、有一株梅。東去數歩、有數竿竹。毎至花時、毎當風便、可以優暢情性、可以長養精神。（東京の宣風坊に一家有り。《中略》戸前の近き側に、一株の梅有り。東に去ること数歩、数竿の竹有り。花時に至る毎に、風の便に当る毎に、以て情性を優暢すべし、以て精神を長養すべし）

（傍線筆者）

［四句目「知花獨笑我多悲」の表現について］

『凌雲集』にこの道真の作品への投影を指摘できる次のような詩が見える。

19和進士貞主初春過菅祭酒舊宅悵然傷懐簡布巨藤・三秀才作一絶

（進士貞主が「初春菅祭酒が旧宅に過（よぎ）りて悵然（ちょうぜん）に傷懐し、布瑠・巨勢・藤原の三秀才に簡するのに和す、一絶）